

2021年12月12日降臨節第3主日説教

ゼファニヤ書 3章 14-20 節

フィリピの信徒への手紙 4章 4-7 節

ルカによる福音書 3章 7-18 節

本日は、降臨節第3主日です。先週の木曜日、総務の方々が、クリスマス礼拝のご案内を発送してくださいました。例年より少し遅れてのお知らせとなっていましたでしたが、12月24日（金）午後6時半から降誕日前夕の礼拝、11時から降誕日第1聖餐式、12月25日（土）10時半から降誕日の聖餐式をABグループ分け関係なく行います。感染対策は従来通りですが、昨年とも異なる今年ならではの形で、皆さまとともに主イエス・キリストのご降誕をお祝いしたいと思います。

さて、本日はクリスマスに向けた準備の期間であるアドベントの中でも、「喜び」の主日とも呼ばれる主日です。ろうそくもそのことを象徴するように、多くの教会でこの主日だけピンクを用います。旧約日課と使徒書は、その「喜び」というテーマに即しているような個所が選ばれています。

「喜び」というテーマに即していると申しましたが、旧約日課の「ゼファニヤ書」自体は、全体として主の怒りの日や、諸国民の滅亡など少々恐ろしい主なる神様の怒りを語ります。この「ゼファニヤ書」は、全体で3章しかない非常に短い預言書です。そして、いつごろ書かれたかを推定するのは難しく、紀元前6世紀のバビロン捕囚のころ書かれたとか、あるいは3世紀ごろであるとか、いろいろな説があります。いずれにしても、内容は、主なる神様の怒りや、人々が主なる神様から離れたことによる、滅亡などが書かれています。

それでは「喜び」のような記述は、どこにあるのかと思いますが、本日の旧約日課の箇所がその部分です。「ゼファニヤ書」は、最終的にイスラエル・ユダの復興、具体的にはエルサレムの罪が贖われることを結論としているのですが、「**娘シオンよ、喜び叫べ。イスラエルよ、歓呼の声をあげよ。娘エルサレムよ、心の底から喜び躍れ。**」（ゼファ 3：14）で始まる本日の箇所は、そのエルサレムの罪が贖われた「喜び」を語っています。

この預言自体は、歴史的出来事と照らし合わせますと、マカバイ王朝の成立で成就したようにも思えます。しかし、先週も見ました通り、単にそれまでと同じように、イスラエル・ユダの自治独立あるいは領土の確保が、この箇所の預言の主旨ではありません。エルサレムの復興、およびイスラエル・ユダの復興を通して、全世界に主なる神様の求める平和が広まることです。その意味では、この預言の言葉は、まだ現代でも成就していないということになると思います。しかし、主なる神様は、最後に喜びを備えてくださっていると信じるとは、大切です。なぜならば、わたしたちイエス・キリストを信じるものにとっては、それはイエス様が再び来られるという具体的な事柄という現象を伴う、終末的な救い・喜びに他ならないからです。

使徒書は、先週に続き、「フィリピの信徒への手紙」です。この手紙は、「獄中書簡」とも「喜びの手紙」とも呼ばれています。本日の個所に「**主に**おいて常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」(フィリピ4:4)とある通りに、「喜び」が明白に表現されています。何を喜ぶのかと申しますと、先に見た「終末的な救い・喜び」です。パウロ自身がその「喜び」に満たされて福音宣教者となったのですが、またそのパウロは、フィリピの人々もその「福音の喜び」を受け入れたことを喜んでいました。さらに、彼らがしっかりと教会生活を重ね、またその中でパウロのためにも祈ってくれていることを大いに喜んでいました。そして、パウロは、獄の中にあっても、それらの「喜び」に満たされているのです。

さて、旧約日課や使徒書と比較しますと、本日の個所は、「ルカによる福音書」にある洗礼者ヨハネの物語です。そこで洗礼者ヨハネは、「**そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。『蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。』**」(ルカ3:7-8)と語ります。それゆえ、本日の福音書の箇所は、すこし「喜び」が薄い感じがします。「喜び」というよりも、どちらかというところ、厳しい悔い改めを求めているからです。また、この罪人の悔い改めは、「ルカによる福音書」の特徴といわれますが、それが現れている個所とも言えます。

一般的に、「**医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである**」(マルコ2:17)とあるように、罪人をそのまま受け入れなさい、と勧めていると思える「マルコによる福音書」に対して、「ルカによる福音書」は、受け入れる前に悔い改めを必要としている、と見られる場合があります。すなわち、「ルカによる福音書」は、人々を主なる神様の救いに導く際に、悔い改めという一つのハードルを置いていると思えるということです。しかし、「ルカによる福音書」の強調点は、救いへ導く道を狭めることでも、困難にすることでも、救われる人を制限することでもないと思います。むしろ逆です。どのような罪人でも、真摯に主なる神様に悔い改めるならば、旧約的な表現を用いれば、主なる神様に立ち返るならば、主なる神様は、赦して下さいということです。「悔い改め」を強調する「ルカによる福音書」の主張はそこにあると思います。イエス様と一緒に十字架につけられた二人の罪人のうち一人は、十字架上でイエス様に悔い改めの言葉を述べて、赦されました。そのような赦しをこの世界に示して下さいなのが、イエス様にほかなりません。

人間が悔い改める対象も、その人間に赦しをあたえる主体も、主なる神様であり、教会ではありませんが、主イエスを信じる教会は、またそこに集められる信仰者は、悔い改めた人を赦し、受け入れなければなりません。「ルカによる福音書」は、そのことをまた強調していると思います。自分たちも、主なる神様に対して悔い改めて、赦されて、教会に集められているからです。言い換えれば、イエス様を通して示された主なる神様の赦しを、この地上に具体化するの**は教会である**ということです。

『聖書』の中で、そのような形に主イエス・キリストを通して悔い改めて、主なる神様に赦され、教会に受け入れられ歩んだ人の中で、もっとも象徴的な人物は誰かという、パウロに他ならないと思います。彼は「ルカによる福音書」には登場しませんが、その続編である「使徒言行録」で活躍します。「使徒言行録」はほとんどパウロの活躍ばかり記述されているとも言えます。本日の福音書箇所にある洗礼者ヨハネの物語は、そのような今も教会が受け継いでいる悔い改めの出発点にほかなりません。その厳しい言葉は、新しい「喜び」に入るための一歩に他ならないのです。

そのように見て行きますと、洗礼者ヨハネの宣言は、「ゼファニヤ書」とも共通点があることが分かります。「ゼファニヤ書」の成立が、バビロン捕囚の時からどうかは分かりませんが、ユダ王国、あるいはエルサレム、あるいは神様を信じるべき人々の墮落や不信仰を厳しく批判し、そのまま神様から離れ続ければ、すべての人の滅亡が来ると語っています。しかし、もしエルサレムが悔い改めれば、罪を贖うと語っているからです。

「そのとき、わたしはお前たちを連れ戻す。そのとき、わたしはお前たちを集める。わたしが、お前たちの目の前で、お前たちの繁栄を回復するとき、わたしは、地上のすべての民の中でお前たちに誉れを与え、名をあげさせると主は言われる。」(ゼファニヤ 3:20) という回復の言葉は、「ゼファニヤ書」の最後の部分です。「ゼファニヤ書」には、「平和」という言葉は出てきませんが、エルサレムが悔い改めて、罪を贖われて、回復する目的は、エルサレムだけに限定される「喜び」ではなく、そこからすべての世界に本当の平和が示される「喜び」です。逆に言えば、世界が本当の「喜び」を知るためには、エルサレムの悔い改めが必要なのです。

洗礼者ヨハネは、「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」(ルカ 3:16) と語ります。これらの言葉は、洗礼者ヨハネが、自分をイエス様のために備えをする存在であると認識していたことを意味しています。しかし、それ以上の意味があります。それは、「ゼファニヤ書」を含めた『聖書』(旧約)の記述を背景としながら、「聖霊と火」という最終的な救いをもたらして下さるイエス様の救いを受け入れるために、その第一歩としての自分の求める「悔い改め」も、水による洗礼も存在するということです。わたしたちも教会に集められるにあたって、水による洗礼を受けましたが、そこにはイエス様を通して聖霊が働いており、終末時に火を通した裁きによってその救いは完成します。

本日の使徒書「フィリピの信徒への手紙」に「喜び」はたくさん記されていますが、「悔い改め」という言葉はありません。しかし、先に見た通り、パウロの悔い改めがあるからこそ、その「喜び」があるのです。そして、パウロは、その「福音の喜び」を宣教したがゆえに、獄にとらわれ、現在の苦しみの中にあるのですが、しかし、その自分のために祈り心配をしてくれる、福音を信じるフィリピの人々のことを知り、喜んでいきます。それゆえにパウロは、

「あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。」(フィリピ4:6)と語ります。「広い心」と訳されている言葉は、「寛容、優しさ」を示す言葉です。新しい「聖書協会共同訳」では「寛容の心」と訳されています。「悔い改めて」という概念が前提にあります。すべての人に広められるべき事柄は、この「広い心、寛容の心」に他ならないとパウロは語っています。「主はすぐ近くにおられます」という部分は、パウロが主イエス・キリストの再臨は近い、「終末的な救い・喜び」の完成は近いと考えていたことを示しています。またそうであるがゆえに、今獄中にあっても喜んでいられたとも考えられます。パウロが期待した通りに終末も主の再臨もありませんでしたが、それは決して大きな問題ではありません。パウロの確信は、もうすぐ世界が物理的現象を伴って終わり、自分だけが救われるというようなものではなく、「すべての人に知られるようになさい」とある通り、そのことができる限り多くの人に知られることにほかならないからです。目的は、終末が来ることではなく、パウロが知った「喜び」が、より多くの人に知られること、つまり主イエス・キリストを信じることを通して得られる「喜び」がより多くの人に知られることであるからです。

クリスマスは、喜ぶ時です。アドベントの期間は、その「喜び」のために備えをする期間であり、ことに今日は、そのための悔い改めの大切さを学びました。しかし、わたしは、これだけクリスマスが一般的になった現在、ただただ喜んでもいいと思います。もし、この日だけは、個人の間であれ国家・集団の間であれ争いごとがない、この日だけは、誰でも一人になることはない、孤独になることも疎外されることもない、この日だけは、誰も悲しまない、そのような日に成ならば、難しい悔い改めなど考えなくても、ただただ喜ぶだけでも良いのではないかと思います。もしあの喜びと平和に満ちたクリスマスが、毎日あったらどれほど幸せなのだろうかと思えるのであれば、主イエス・キリストが誕生した意味が、直接的ではなくても世界に広まったことにもなるといえるからです。

今年のクリスマスの時期も、世界はまだまだ混乱の中にあります。コロナ禍のような新しい問題の他、従来からある課題や問題も未解決のまま存続しています。わたしたち自身の教会の歩みでさえも、来年はどうなるか、未確定な部分が多くあります。来年のことだけではなく、これから祝おうとしているクリスマスの予定ですら、先週決めたばかりでした。今年はそのような中で、わたしたちは、主の降誕を「喜び」ます。なぜわたしたちが困難な中でも主のご降誕を祝おうとするのか、それは本当の希望がいつまでも消えないことを信じるためです。本当の「喜び」がなんであるかを示し続けるためです。わたしたちの教会においても、課題はたくさんありますが、わたしたち自身が、心からその「喜び」に満たされたいと思います。なかなかそうはいかなかったとして、それが与えられるように、共に主の降誕を祝うことを通して、求め続けたいと思います。

今も、昔も、『聖書』の時代も、未来は人間にはわかりません。わからないからこそ、分かりやすい人間の考えや言葉に惑わされずに、『聖書』の言葉を信じて歩んでいきたいと思えます。